

二〇二四年度

第一回 入学試験問題

国語（五十分）（全十一ページ）

〈注意〉

- 一. 試験開始の指示があるまで、この問題冊子・解答用紙を開けてはいけません。
- 二. 試験開始の指示と同時に、解答用紙に受験番号と氏名を書きなさい。
- 三. 試験開始後、問題冊子がそろっていない、印刷がはっきりしないなどの不備があったら、手をあげて試験監督に知らせなさい。
- 四. 解答はすべて解答用紙の指定されたところに書きなさい。
- 五. 記述問題で字数制限がある場合は、句読点など記号も一字として数えなさい。
- 六. 問題文は上下二段になっています。



一 線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- (1) 倉に米をチヨゾウする。
- (2) テンボウ台から夜景をながめる。
- (3) ユウビン局から手紙を送る。
- (4) 運動会で親子キョウウギの玉入れに参加する。
- (5) 畑にヒリヨウをまく。

二 次の部が直接かかる言葉を、——線ア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- (1) ア図書館で静かにイ歴史のウ本をエ読む。
- (2) 多くの人がそのア映画はイとてもウ面白いとエ言った。
- (3) 彼のア新しいイ車はウ速くてエ快適です。
- (4) かつてア公園だったイ場所にウ家がエ建った。
- (5) 私は友達とア一緒にイおいしいウ草もちをエ食べた。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

主人公の少年は、毎日バスを使って母の入院している大学病院にお見舞いに通っている。退院はいつになるかわからないが、定期券を買ってそれだけ母の入院が長引くような気がして、父と相談して回数券を買うことにした。

① 生まれて初めて、一人でバスに乗った。

家族でデパートに買い物に行くときに、いつも使う路線だ。ものごころついた頃から、月に一度は乗っていた。五年生になってからは親と一緒にいるところを友だちに見られるのが嫌だったので、バス停でも車内でも、**A** 両親と離れて——一人で乗っていた。

だから、だいじょうぶだ、と思っていた。だいじょうぶじゃないと困るんだ、とも自分に言い聞かせていた。もう五年生の二期なんだから。同級生の中にはバスどころか電車にも一人で乗って進学塾に通っているヤツもたくさんいるんだから。

でも、いままでの「一人」と今日の「一人」は違っていた。『本町一丁目』のバス停に立っているときから緊張で胸がどきどきして、おしっこをがまんしすぎたあとのように、下腹が落ち着かない。

**B** バスが来た。後ろのドアから乗り込んで、前のドアから降りる。手順は**C** 覚え込んでいるはずだったのに、整理券を取り忘れそうになった。

『本町一丁目』の整理券番号は7。運転席の後ろにある運賃表で確かめると、整理券番号19の『大病院前』までは、子ども料金で百二十円だった。家族で買い物に行くときは、**D**17番の『銀天街入り口』で降りる。子ども料金は百円。四年生までは、バスに乗り込むとすぐに整理券を母に渡し、母が少年のぶんもまとめて運賃箱に小銭を入れていた。五年生になってからは、バスに乗る前に百円玉を一つ渡されていた。「落としても、お母さん、知らないからね」といたずらっぽく笑う母の顔を思いだした。二人掛けのシートの肩の部分にある取っ手を、強く握り直した。

バスはスピードを上げたかと思うと、すぐにバス停に停まる。そのたびに少年は停留所の名前を確かめて、『大病院前』まであといくつ、と頭の中で数字を書き換える。降車ボタンを押しそびれてはいけない。整理券をなくしてはいけない。運賃箱の前でもたもたしてはいけない。財布から取り出すときにお金を落としてはいけない。いまのうちに輸出しておこうか。百円玉一つに、十円玉二つ——コインが一つから三つに増えただけで、握り込んだ手のひらに力を**E**「込めないとお金が落ちそうな気がする。」

バスは中洲のある川に架かった橋を渡って、市街地に入る。②西にかたむいた太陽が街ぜんたいを薄いオレンジ色に染めている。

次は大病院前、大病院前、と車内アナウンスが聞こえた。お降りの方はお手近のボタンを押して……とつづく前に、ボタンを押した。急いで通路を前に進み、バスがまだ走っているうちに運賃箱のそばまで来た。

「停まってから歩かないと」

運転手に強い声で言われた。「転んだらケガするし、他のひとにも迷惑だろ」

——まだ若い運転手は、制服を目深にかぶって前を**F**見つめたまま、少年のほうには目も向けなかった。

(中略)

次の日、バスに乗り込んだ少年は前のほうの席を選び、運転席をそっと覗き込んだ。③あのひとだとわかると、胸がすばまった。

初めてバスに一人で乗った日に叱られた運転手だった。その後も何度か、同じ運転手のバスに乗った。まだ二冊目の回数券を使いはじめたばかりの頃、整理券を指に巻きつけて丸めたまま運賃箱に入れたら、「数字が見えないとだめだよ」と言われた。叱る口調ではなかったが、それ以来、あのひとのバスに乗るのが怖くなった。たとえなにも言われなくても、運賃箱に回数券と整理券を入れてバスを降りるとき、いつもムスツとしているように見える。

嫌だなあ、運が悪いなあ、と思ったが、回数券を買わないわけにはいかない。『大病院前』でバスを降りるとき、「回数券、ください」と声をかけた。

運転手は「早めに言ってくれないと」と顔をしかめ、足元に置いたカバンから回数券を出した。制服の胸の名札が見えた。「河野」と書いてあった。

「子ども用のでいいの?」

「……はい」

「らへんのやつ？」

「……百二十円の」

河野さんは「だから、そういうのも先に言わないと、後ろつつかえてるだろ」とぶつきらばうに言つて、一冊差し出した。「千二百円と、今日のぶん、運賃箱に入れて」

「あの……すみません、三冊……すみません……」

「三冊も？」

「はい……すみません……」

大きいため息をついた河野さんは、「ちよつと、後ろのお客さん先にするから」と少年に脇にどくよう顎を振った。

少年は頬を赤くして、他の客が全員降りるのを待った。お父さん、お母さん、お父さん、お母さん、と心の中で両親を交互に呼んだ。助けて、助けて、助けて……と訴えた。

客が降りたあと、河野さんはまたカバンを探り、追加の二冊を少年に差し出した。

代金を運賃箱に入れると、「かよってるの？」と、さつきよりさらにぶつきらばうに訊かれた。「病院、かようんだったら、定期のほうが安いぞ」  
わかつている、そんなの、言われなくたって。

「……お見舞い、だから」

かぼそい声で応え、そのまま、逃げるようにステップを下りて外に出た。

全然とんちんかんな答え方をしていたことに気づいたのは、バスが走り去ってから、だった。

夕暮れが早くなった。病院に行く途中で橋から眺める街は、炎が燃えつつような色から、もつと暗い赤に変わった。帰りは夜になる。最初の頃は帰りのバスを降りるときに広がっていた星空が、いまはバスの中から眺められる。病院の前で帰りのバスを待つとき、いまはまだかろうじて西の空に夕陽が残っているが、あとしばらくすれば、それも見えなくなってしまうだろう。

【一】

少年は父に「迎えに来て」とねだるようになった。車で通勤している父に、会社帰りに病院に寄ってもらって一緒に帰れば、回数券を使わずにすむ。

「今日は残業で遅くなるんだけどな」と父が言っても、「いい、待ってるから」とねばった。母から看護師さんに頼んでもらって、面会時間の過ぎたあとも病室で父を待つ日もあった。

【二】

【最後から二枚目の回数券を——今日、使った。あとは表紙を兼ねた十一枚目の券だけだ。

【三】

【毎月のお小遣いは千円だから、あとしばらくはだいじょうぶだろう。

ところが、迎えに来てくれるはずの父から、病院のナースステーションに

電話が入った。

「今日はどうしても抜けられない仕事が入っちゃったから、一人でバスで帰って、って」

看護師さんから伝言を聞くと、泣きだしそうになってしまった。今日は財布を持って来ていない。【 IV 】

母の前では涙をこらえた。病院前のバス停のベンチに座っていると、必死に唇を噛んで我慢した。でも、バスに乗り込み、最初は混み合っていた車内が少しずつ空いてくると、急に悲しみが胸に込み上げてきた。シートに座る。④窓から見えるきれいな真ん丸の月が、じわじわとにじみ、揺れはじめた。座ったままうずくまるような格好で泣いた。バスの重いエンジンの音に紛らせて、うめき声を漏らしながら泣きじゃくった。

『本町二丁目』が近づいてきた。顔を上げると、車内には他の客は誰もいなかった。降車ボタンを押して、手の甲で涙をぬぐいながら席を立ち、ワインドブレーカーのポケットから回数券の最後の一枚を取り出した。

バスが停まる。運賃箱の前まで来ると、運転手が河野さんだと気づいた。それでまた、悲しみがつのった。【 V 】

整理券を運賃箱に先に入れ、回数券をつづけて入れようとしたとき、とうとう泣き声が出してしまった。

「どうした？」と河野さんが訊いた。「なんで泣いてるの？」——ぶっきらぼうではない言い方をされたのは初めてだったから、逆に涙が止まらなくなってしまうた。

「財布、落としちゃったのか？」

泣きながらかぶりを振って、回数券を見せた。  
「じゃあ早く入れなさい——とは、言われなかった。」

河野さんは「どうした？」ともう一度訊いた。

その声にすうつと手を引かれるように、少年は嗚咽交じりに、回数券を使いたくないんだと伝えた。母のこともしゃべった。新しい回数券を買い、そのぶん、母の退院の日が遠ざかってしまう。ごめんなさい、ごめんなさい、と手の甲で目元を覆った。警察に捕まってもいいから、この回数券、ぼくにください、と言った。

⑤河野さんはなにも言わなかった。かわりに、小銭が運賃箱に落ちる音が聞こえた。目元から手の甲をはずすと、整理券と一緒に百二十円、箱に入っていた。もう前に向き直っていた河野さんは、少年を振り向かずに、「早く降りて」と言った。「次のバス停でお客さんが待ってるんだから、早く」——声はまた、ぶっきらぼうになっていた。

次の日から、少年はお小遣いでバスに乗った。お金がなくなるか「回数券まだあるのか？」と父に訊かれるまでは知らん顔しているつもりだったが、その心配は要らなかった。

三日目に病室に入ると、母はベッドに起き上がって、父と笑いながらしゃべっていた。会社を抜けてきたという父は、少年を振り向いてうれしそうに言った。

「お母さん、あさって退院だぞ」

(中略)

車内は混み合っていたので、走っているときに河野さんに近づくことはできなかった。それでもいい。通路を歩くのはバスが停まってから。整理券は丸めてはいけない。

次は本町一丁目、本町二丁目……とアナウンスが聞こえると、降車ボタンを押した。ゆつくりと、人差し指をピンと伸ばして。

バスが停まる。通路を進む。河野さんはいつものように不機嫌な様子で運賃箱を横目で見ていた。

目は合わない。それがちょっと残念で、でも河野さんはいつもこうなんだもんな、と思い直して、整理券と回数券の最後の一枚を入れた。

降りるときには早くしなければいけない。順番を待っているひともいるし、次のバス停で待っているひともいる。

だから、少年はなにも言わない。回数券に書いた「ありがとう」がいました「にあとで気づいてくれるかな、気づいてくれるといいな、と思いながら、ステップを下りた。

⑥バスが走り去ったあと、空を見上げた。西のほうに陽が残っていた。どこからか聞こえる「ごはんできたよお」のお母さんの声に応えるように、少年は歩きます。

何歩か進んで振り向くと、車内灯の明かりがついたバスが通りの先に小さく見えた。やがてバスは交差点をゆつくりと曲がって、消えた。

(重松清『小学五年生』より。なお本文には省略等があります。)

問一——線①「生まれて初めて、一人でバスに乗った」とありますが、バスを待つ少年の様子が最もよく表われている言葉を本文中から四十五字以内で探し、はじめと終わりの四字をそれぞれ答えなさい。

問二 

A	・	B	・	C	・	D	・	E	・	F
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

 に入る言葉として適当なものを、次のア～カの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア わざと    イ すっかり    ウ いつも  
エ グツと    オ やつと    カ じつと

問三——線②「西にかたむいた太陽が街ぜんたいを薄いオレンジ色に染めている」とありますが、ここから少年のどのような様子が読み取れますか。適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 一人きりでバスに乗っている時間を楽しんでいる様子。  
イ 一人きりでバスに乗っていることを心細く感じている様子。  
ウ 間もなくバスが目的地に到着することに驚いている様子。  
エ ようやくバスが目的地に到着することに安心している様子。

問四——線③「あのひとだ」とわかると、胸がすばまった」について、次の各問いに答えなさい。

(1)「胸がすばまった」とありますが、それはなぜですか。解答欄に合うよ

うに四十字以内で説明しなさい。

【 四十字以内 】から。

(2)「あのひとつ」は少年の目にはどのように見えましたか。本文中から十字程度で抜き出しなさい。

問五 【 一 】 【 二 】 【 三 】 【 四 】 【 五 】 【 六 】 【 七 】 【 八 】 【 九 】 【 十 】に入る適切な言葉を、

次のア～オの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア 回数券を使わなければ、家に帰れない。

イ こんなひとに最後の回数券を渡したくない。

ウ 明日からお小遣いでバスに乗ることにした。

エ 買い足した回数券の三冊目が——もうすぐ終わる。

オ それでも、行きのバスで回数券は一枚ずつ減っていく。

問六 ——線④「窓から見えるきれいな真ん丸の月が、じわじわとにじみ、

揺れはじめた」とありますが、ここから少年のどのような様子が読み

取れますか。本文中の言葉を使って、四十字以内で説明しなさい。

問七 ——線⑤「河野さんはなにも言わなかった」とありますが、それはな

ぜですか。適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えな

さい。

ア 泣きながら何度もあやまる少年の姿を見て、これまで自分が少年に

対してぶっきらぼうな態度を取ってきたことを反省したから。

イ 警察につかまってもいいから回数券をくださいという少年のかたくな態度にあきれてしまったから。

ウ 新しい回数券を買おうと、その分母の退院の日が遠ざかってしまうという少年の気持ちが変わったから。

エ 泣きじゃくる少年の姿を見ているうちに、自分の少年時代がよみがえってなつかしくなったから。

問八 ——線⑥「バスが走り去ったあと、少年は歩きだす」とありますが、

ここから少年のどのような様子が読み取れますか。適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 父とのやりとりやバスのできごとを通して、閉ざされていた少年の心が解き放たれていく様子。

イ 母の退院を喜びながらも、もう河野さんのバスに乗ることはないことをさびしく感じている様子。

ウ 回数券に書いた「ありがとう」がとうとういきました」に、河野さんなら気づいてくれると確信している様子。

エ 母の入院やバスのできごとをきっかけに、少年がたくましく成長していく様子。



四 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

新聞の良さは記憶のフックがたくさんあること

① みなさんの家では新聞を取っていますか？ 取っていない家庭が多いと思います。今はインターネットが普及しているので、わざわざ新聞を取らなくても、ネットで無料の情報が好きなだけ検索できるようになっていきます。

「新聞なんて、必要なの？」そんな声も聞かえてきそうですね。でも新聞はやはり必要だと私は思います。② ネットにメリットがあるように、新聞にもメリットがあるんです。

そのメリットは何かというと、ひとつにはネットの画面で見ると、紙に印刷された文字で読むほうが記憶が定着することです。

ネットの情報はどうしても画面をサーッと流してしまいがちです。感覚的に文字が頭にひっかからないので、記憶にあまり残らない。サーッと読めちゃうのが、ネットの良いところでもあるのですが、記憶に定着するかという点で見たら、紙に印刷されたもののほうが、圧倒的に有効なのではないでしょうか。

なぜかというところ、紙に印刷されたものは、文章が書いてあった場所や形を記憶にどどめやすいためです。

みなさんも新聞の紙面を思いだしてみてください。見出しの位置や大きさがみな違いますし、記事が縦長だったり、横長だったり、レイアウトがいろいろですね。みな違うので、記憶にひっかかるフックがたくさんあるのです。

教科書もそうですね。私は世界史や日本史を勉強するとき、「あの話は教科書の右上に書いてあった」「あの項目は左すみにあった」など、場所や位置で記憶していました。

でももしこれらの事項がバラバラにタブレットの画面に出てきたら、ものすごく記憶しづらかったと思います。ネットの場合、全部が横書きの同じパターンで出てくるので、メリハリがなく、記憶に残りにくいのです。

たとえば、新聞の面はAで、そこに掲載されている記事は家のようなものです。新聞の場合はBがさまざまなレイアウトで存在しているので、和風テイストのあの家とか、赤い屋根の洋館のあの家などと、ひとつひとつが記憶しやすい。

一方、ネットの記事は整理されているので、Cがずっと続いていくような感じです。つまりDなので、どの家をとっても記憶しづらいのです。

新聞のほうがいちいち記事や、航空図のように一瞥できる良さがあります。

この「一瞥性」が新聞のメリットです。ぱっと開いたときに全体を見通しやすいので、ざっと見出しを見て、その中でセレクトして記事を読むことができます。

ネットは順番に流して見ていくことしかできませんから、新聞のような一覽性はないわけです。

もちろんネットにも良い点があります。記事を検索することにかけてはネットの「a」に出るものはありません。過去の記事の検索はネットなら一発でできます。関連する記事をまとめて読むこともできます。

これが新聞だと、図書館まで行って、いちいち他の新聞を調べたり、過去の縮刷版を広げなければいけません。その手間たるや、考えただけで気が遠くなります。ネットがない時代は、一日中、図書館にこもってそんなこともしていたわけです。

そう考えるとネットの便利さははかりしれません。でもだからといって、ネットだけで事足りるわけではないと私は思います。

③印刷された新聞ならではの良さがある。それを忘れてはいけないと私は思います。

(中略)

テレビやネットのニュースも実は新聞記事をもとにしている

情報は新聞から得る、という話をする、「ニュースならネットやテレビで十分知ることができますよ」と言う人がいます。みなさんもそう思っているのではないのでしょうか。でも、④今は情報化社会と言われるわりには、収集している情報が圧倒的に少なかったり、偏かたよっていると思います。

私も、「みんな、スマホやパソコンやタブレットを使っているから、ネットのニュースくらい見ているかな」と思って、学生たちにいろいろニュースの話題をふつてみるのですが、それほどネットのニュースをチェックしているというわけではないようです。

やはり新聞を読んでいるかどうかで情報量が決定的に違ってしまふ。

⑤新聞というのは情報収集の柱なんです。結局、ネットでも積極的にニュースなどを読むのは新聞も読んでいる人たちのようです。

インターネット社会といっても、社会に関心がなければ自分の興味があるところしか見ません。そうすると情報の範囲はんいが限られてしまいます。

しかし新聞を読む人は、興味がある記事以外にも一面や経済面、社会面などひと通り眺ながめますし、大見出しになっているところはイヤでも目に入ってきます。

つまりいろいろなアンテナが立っているので、中国経済の話や安保法制、ヨーロッパの難民問題のことなど幅はば広くアンテナにひっかかってきます。

そういう人がネットのニュースを見るときは、新聞である程度の情報が入っているのに、ネットでも重要な記事や社会で問題になっていることなど、主体的に記事をセレクトし、関連記事をまとめて読めるようになります。

私も新聞が手元になく場合は、ネットのニュースを読みますが、日頃ひごとから新聞を読んでいて情報に対するベースができていますので、関連した情報をうまくつつけて探し出すことができます。ネットのニュースはあくまで新聞記事のサブとして取得するのが正しいやり方だと思います。

Ⅰ ネットで流しているニュースは、誰がつくっていると思いますか？

ヤフーニュースなど、ネットに載っているニュースはIT企業の社員が取材して書いたものではありません。新聞各社が出している記事を短くまとめ、要約して出しているのです。だからネットのニュースの詳しい情報源は新聞にあります。

しかし今「メディアとはなんですか？」と質問して「新聞」と答える人は1/2割しかないのではないのでしょうか。情報提供という意味で新聞はひじょうに大きな役割を果たしているにもかかわらず、情報源が新聞であるということにあまり関心が払われていない。それが現状です。

(中略)

新聞は読まなくても、ニュースに関心がある人はひじょうに多いので、テレビでニュースについてコメントするときは、「何々新聞によると」など、新聞に基づいて紹介したほうが視聴者も安心します。

Ⅱ 新聞には事実が書かれている、とみんなが思っているからです。読まなくても⑥たいいていの人には新聞への信頼感があります。

ですから新聞が事実ではないことを報道したとなれば、新聞社全体が揺らぐような大騒ぎになります。原発事故の報道でもいろいろなミスが発覚したことがありますね。そうなる人たちまち新聞社の信頼性が問われてしまうのです。

Ⅲ 新聞は「事実」に対して厳格です。取材しても必ず裏付けを取るのが原則です。ですから新聞では毎日膨大な分量の記事を掲載しているに

もかわらず、訂正記事はほんのわずかしかないです。

これはとりもなおさず新聞記者の人たちが、かなり頑張って仕事をしているからにはかなりません。彼らは毎日一生懸命、人々に事実を伝えようとしているのです。そしてテレビで新聞記事が紹介される理由も、テレビ局が独自に取材して、毎日ニュースをつくりあげるのは大変だからです。もちろんテレビ局も取材はしますが、たいいていは新聞報道を参考にして、身をチェックした上でニュース原稿をつくっています。

テレビというメディアに取材能力がないわけではありませんが、やはり新聞社のほうが圧倒的に取材能力が高いのです。

Ⅳ 最近では新聞社も新聞購読料が減り、徐々に記者が少なくなり、報道の基盤が脆弱になりつつあります。新聞社は新聞紙という紙媒体の購読料によって成り立っているのですが、かつてのように日本のほとんどの世帯が新聞を取っているという、新聞紙を中心とした情報化社会のまねにみる成熟ぶりは、もはや見る「」もありません。

新聞を購読する人が減ったので、新聞広告の価値も下がり、広告収入も減少しています。

ネットのニュースはタダで便利なのですが、そのニュースは、新聞の購読料や広告収入に支えられています。タダで質の高い情報を提供できるわけではないのです。

X

(齋藤孝「新聞力——できる人はこう読んでいる」より)

なお、本文には省略等があります。

中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

問一——線①「みなさんの家では新聞を取っていますか？」とありますが、

筆者がこのように問いかけるのはなぜですか。適当なものを、次のア～

エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 本文における筆者の立場を明確にしたいから。

イ 新聞を取っていない家庭を批判したいから。

ウ 新聞が不要であることを暗に示したいから。

エ 新聞の良さに改めて気づいてほしいから。

問二——線②「ネットにメリットがある」とありますが、筆者の考えるイン

ターネットのメリットは何ですか。本文中から一続きの二文で探し、は

じめの五字を答えなさい。

問三 

A
---

・

B
---

・

C
---

・

D
---

に入る言葉として適当なものを、次のア～

エの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア 住宅地      イ 人工的な街なみ

ウ 同じ形の家      エ いろいろな形の家

問四——線a「」に出るものではありません・b「見る」」もありません

の空欄に入る言葉として適当なものを、次の意味を参考にア～エの

a「」に出るものではありません(その人よりも優れた人はいないということ)と。

ア上    イ下    ウ右    エ左

b「見る」」もありません(以前の様子と変わって何もないということ)。

ア人    イ影かげ    ウ姿    エ目

問五——線③「印刷された新聞ならではの良さ」とありますが、それはどのようなことですか。本文中の言葉を使って、三十五字以内で説明しなさい。

問六——線④「今は情報化社会と言われるわりには、収集している情報が圧倒的に少なかったり、偏っていると思います」とありますが、それはなぜですか。本文中の言葉を使って、三十五字以内で説明しなさい。

問七——線⑤「新聞というのは情報収集の柱なんです」とありますが、このように筆者が述べる理由として適当ではないものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 新聞を読むと、情報に関するベースができるので、関連した情報を的確に探し出すことができるから。

イ 新聞を読むと、興味がある記事以外にもひと通り眺めることができるので、幅広く情報を得ることが出来るから。

ウ 新聞を読むと、主体的に記事をセレクトできるようになるので、インターネットの関連記事をまとめて読むことができるから。

エ 新聞を読むと、大見出しになっているところが目に入ってくるので、記事の内容を読まなくても情報を正確に知ることが出来るから。

問八 ア・ロ・ハ・ニに入る言葉として適当なものを、次のア

～エの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア しかし イ なぜなら ウ ところで エ たしかに

問九 ——線⑥「たいていの人には新聞への信頼感があります」とあります

が、その理由を説明した次の文の空欄に当てはまる言葉を、本文中よりそれぞれ十字以内で抜き出しなさい。

新聞は【1】なものであるため、取材をする時には【2】という原則があるから。

問十 Xには筆者の考えが入ります。適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 世の中に伝えられるニュースなど情報の大元は新聞であることにもう少し関心を払い、新聞を大事にする文化的土壤が必要だと私は

思います。

イ 情報化社会と言われても自分の興味のある情報にしか目を向けない若者たちには、インターネットから離れて新聞から情報を得ることを基本とする姿勢が必要だと私は思います。

ウ 新聞には事実が書かれているという信頼感を私たちが持ち続けるためには、新聞購読を義務化して新聞が報道の基盤としての役割を維持できるようにすることが必要だと私は思います。

エ 新聞やインターネットなどの複数のメディアが報道を担う状況を改善し、新聞のような質の高い情報をインターネットでも提供できるように環境を整えていくことが必要だと私は思います。